

垂水城(別名無)(指定無)(津市垂水町)

経緯 南北朝争乱の中、応安4年(1371)細川民部少輔満之らが伊勢国に出兵し中南勢を転戦している。この中で「垂水山」が攻防の舞台の一つになっており、同5年にも細川頼元が再び出兵して「垂水山」で戦闘が起こっている・このように「垂水山」が北朝方の攻撃の標的になっていることから垂水付近に南北朝系の拠点が存在したと考えられる。プレ垂水城とも言えるような城の想定も可能である。天文十八年(1549)垂水城合戦がありその戦いに備えて城を強固に改修したと言われている。(発掘調査で判明)垂水城は北畠氏系の城でありその場所が一志郡と安濃郡の境界に近い垂水であることから合戦の相手は当時敵対していた長野氏であったと思われる。

歴史 北畠氏の一元的支配が始まる16世紀初頭以前では在地領主と国司との二重構造であったと考えられる。垂水氏が在地領主であった可能性は高く垂水城の築城主であった可能性がまた高い。垂水氏は塩や鉄釜を媒介として垂水御厨(たるみみくり)と関わりを持ち、現地管理人のような立場にいた可能性もある。長野氏の軍事的行為を受ける一因でもありそうだ。

境目の城の性格が高まるにつれ改修が行われた。しかし16世紀後葉には城の機能は停止していたと考えられる。理由1、永禄年初に長野氏が北畠氏から養子を迎えている。2、永禄十年(1567)伊勢侵攻で役目を終えた。

環境 伊勢街道と伊勢湾を同時に監視できる段丘の東端にある。この段丘には南北2Kmの間に複数(垂水城・池の谷砦・小森上野城・小森城)の城があった。又、垂水城の南の丘陵には15世紀初頭、北畠満雅が岩田川の合戦で陣地を置いたという伝承が残る、守備や築城には好条件な一帯である。

一族 垂水祐厳法願は土豪層の一人。15世紀前半北畠氏被官となり奉公人として活動。側近の位置付け。16世紀半ばには重臣として重用されていたと考えられる。ところが、信雄が北畠の家督を継いだ天正四年(1575)以降には「信雄分限帳」などの史料で垂水氏の名は確認できない。

垂水町の玄関口を表すように商業施設が整備され背後の団地の住みやすさが想像される。今となっては交差点信号の角から北に向かって傾斜が続いていることだけが、かすかに垂水城をイメージさせるくらいである。

「山城遺産」による

